

イギリス土木学会（ICE）図書館の活動状況

図書館委員会委員長 五十畑 弘（日本大学生産工学部教授）

会員数8万人を擁するイギリス土木学会（以下ICE）では、付属図書館を「知識移転部門（Knowledge Transfer Department）」と位置づけて、近年の電子データ化をテコに、その役割を拡大しつつある。去る3月2日（月）に、ICEを訪問する機会があり、日英土木学会図書館の活動に関する情報交換と専門図書館のあり方について議論を行ったので、ICE図書館の活動概要を報告する（写真1）。

ICE図書館（知識移転部門）の役割

ICEはその活動目的として、①土木技術



写真1 ICE図書館長との面談の状況（左：図書館長（Head of Knowledge Transfer）のM.クライム氏）

にかかわる専門職の能力開発と資格付与、②

技術者相互の知識と実務技術の情報交換、③世界全体を視野に入れた社会への貢献の促進の3点を掲げており、これを実現していく過程において図書館（知識移転部門）は、会員の継続教育および生涯教育に対して知識を交換し、蓄え、広め、さらに世界の土木技術を確実に記録することで、その役割を果たすとしている。

これらの図書館活動は、ICE会員に対する「知識移転」の重要な手段として、講習会や出版事業と並んで3本の柱の一つを構成している。知識移転部門の中期計画（2007～2012年）のビジョンでは、「世界で最も充実した工学知識の情報ソース」を目指すことを掲げている。

ICE会員数の状況

1818年に設立されたICEは、この10年後の1828年に公益法人（Registered Charity）の認可を受けた。設立時にコーヒージャウスで開催されたとされる歴史的な第1回評議会の記録が、図書館アーカイブに保管されている（写真2）。

これ以後150年の間に6回にわたり設

立認可の補足・変更が行われたが、1975年に認可の補足・変更を一本化して新たな認可を受けた。その後、地方公共団体技術者協会（1984年）や、土木技能者協会（1989年）を吸収合併し、会員数は8万人に達している。会員の20%がイギリス以外の152ヶ国の国籍者であり、グローバルな団体でもある（図1）。

ICE図書館では、原則として会員に限定してサービスを提供している。近年の電子データ化は、イギリス国内の地方部や、世界に分布する会員サービスへ有効な方法となっている。

会員数の推移は、過去5年間連続して増加傾向をたどっているが、内訳では、比較的年齢層の若い会員数が増加しているのに対し、正会員、フェローなどの年齢の高い層は減少の傾向にある。現時点の会員内訳では、仕事をリタイアした会員が15%、約1万2000人おり、この層がICE活動に依然大きな影響を維持している。土木史研究委員会（PHEW）の調査、研究や、高速道路建設史の図書の発刊などの過去の技術実績の記録は、この層に依存しており、技術、知識の継続に貢献をしていることは、注目に値する。

ICE図書館の施設・サービス

ICE図書館は、世界最大規模の土木分野専門の図書館である。ロンドンの国会議事堂近くのICE本部2階に位置し、地階には資格保有のアーキビスト（公文書管理の専門家）のいるアーカイブ（書庫）がある。図書館スタッフ数はアーカイブを含み12名である。

写真2 ICE設立時の議事録（1818年1月2日にコーヒージャウスで開催されたICE設立の第1回の評議会議事録の1ページ目。2ページ目に有名な「技術者とは哲学者と作業者の通訳のようなもので…」の記述がある）

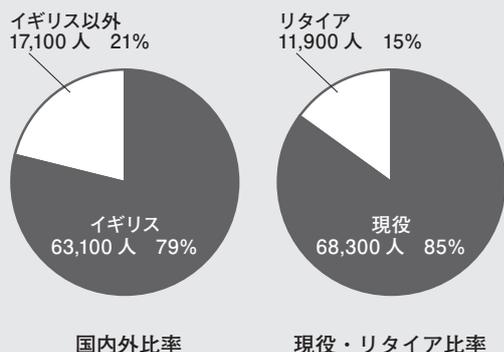
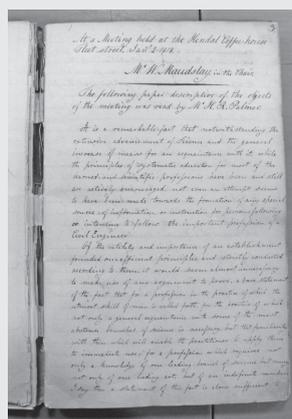


図1 ICEの会員数（ICEメンバーズガイド2009ほかより）

主な蔵書・資料には、10万冊を超える図書、コンファレンス発行物、雑誌、報告書、規格ハンドブック、映像、アーカイブ資料などがある（表1）。図書館のサービスには、資料の検索、資料のオンライン提供、コピー、問い合わせ回答などのほかに、特定のテーマ、構造物などに関する調査委

表1 ICE図書館の主な収蔵・資料

図書	10万冊以上の蔵書
コンファレンス 発行物	定期的開催される主要なコンファレンスの資料 (土質工学、地震工学、オフショア技術など)
雑誌	約900種以上の世界各国の定期刊行物
報告書	主要な報告書シリーズ (TRLレポート、CIRIALレ ポート、Hydraulics Research Reportなど)
規格	BS規格(過去のものも含む)、ユーロコード、およ びDIN、US規格
ハンドブック	法令、準拠ガイド、専門辞典など
パンフレット類	2万点以上のパンフレット、技術レポート、抜き刷り
バーチャルライブラリ	論文集のダウンロード(有料)
AV	映像、ビデオ、スライドなど
条例、法令	道路、建設、安全など
アーカイブス	文書、技術資料、図面など
会員情報	過去の会員入会書、死亡記事、記録、家系

託も行っている。また、海外を含み図書の貸し出しを来館者メール依頼双方に対して受け付けており、図書館間の図書の貸出しも行っている。

図書館サービスの対象は、前述のように基本的には会員に限定されているが、イギリスの機械学会(I ME)、土木測量協会(I C E S)の会員も利用可能となっている。例外的に工学カウンスル所属のほかの協会会員は、所属協会を通じて閲覧が許可されている。これ以外の一般に対しては、図書館の利用・閲覧を有償で公開している。

バーチャル・ライブラリーでは、ウェブ上での検索により論文全文のダウンロードや、アーカイブ資料についても1836年から現在までの全資料の検索・閲覧が可能である。また、昨年からは、ウェブ上でI C E収蔵資料のすべてをカバーする図書目録が利用できるようになり、図書の予約・貸し出しなどがこれに移行している。まだ立ち上がったばかりであるが、昨年

2008年の1ヶ年で1万人の利用者があった。電話問い合わせ、来館に対して、Eメールによる問い合わせに移行しつつある。図書館側からの回答はほとんどがデジタル化している。検索システムの重要性は高まっているが、電子情報の提供は同時に新たな課題ももたらしている。たとえば、著作権の問題が電子情報の提供の障害となりつつある。また、電子媒体の長期的な耐久性の問題は大きい。現段階では特に手を打っていない。

出版活動、エキジビション

I C Eは公益法人であるが、商業団体である出版社のトーマス・テルフォード社を傘下にもっており、ここを通じて図書、雑誌の出版が行われている。同社は、図書、雑誌の出版以外にも、研修、リクルート、I C E本部建物管理、ケータリングなどの事業を行っており、この収益から年間3万ポンドの資金を無税でI C Eに贈与している。

I C Eの出版は、各種の活動の成果として行われるが、知識移転部門である図書館も、自らが主導して図書を発刊している。たとえば長期的な出版として、高速道路の建設史シリーズ(The Motorway Achievement series)や、現在進行中の土木技術者人名辞典(The Bibliographical Dictionary of Civil Engineers)は、すでに第1巻(1500~1830年)、2巻(1830~1890年)が発刊済みで、第3巻(1890~)の執筆が進められている。

I C E図書館は、会員へのサービスを第一

としているが、一般に対する情報公開としては、著名な土木技術者やその業績を中心に学会外での展示を行っている。テムズ川に永久係留され博物館となっている軽巡洋艦ベルファストや、その下流にあるタワーブリッジでの展示が行われている。

日本の土木学会図書館における活動

土木学会図書館における近年のデジタル化とウェブの利用の拡大の傾向、およびそれに伴う課題は、I C Eの場合と多くの共通点をもつ。土木学会図書館では、これまで過去7年にわたって、科研費を得てコンテンツの積極的なデジタル化を進め、最近ではこれまで手付かずとなっていた歴史的土木構造物の図面についても収集とデジタル化に着手している。収蔵資料の電子化の成果として、土木図書館ホームページのデジタルミュージアムを通じて、



写真3 ICE図書館内部(ICE本部の2階にある図書館内部。このほか、セントハウスにも書庫がある)



写真4 アーカイブの内部(地下にあるアーカイブの資料保管庫の内部。この隣に資料閲覧室がある)

多くの資料を一般に公開している。I C Eの場合、会員を主たる情報提供対象者として特定していることや、情報提供は有償であるのに対し、土木学会図書館の場合は、ウェブ上で課金なしに広く公開している。展示については、土木学会図書館では、学会内や、全国大会などの場でパネル展示を行っている。土木図書館の利用頻度は、来館者が年間約4000名程度であり、これに対し土木図書館ホームページへのアクセス数は、約16万件に達しており、ウェブを通じて情報提供の傾向が強い。今後、電子化がさらに進むことともに、従来の専門領域の情報に加え、インフラの新設から既設施設の維持・更新、あるいは文化的側面といった技術者の活動領域の拡大によって、オンラインでタイムリーな情報へのニーズは高まり、これに伴って図書館も学会活動の柱としてそのあり方を変えていく必要がある。